

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年 5月31日現在

機関番号：16401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2012

課題番号：24653182

研究課題名（和文） 着ぐるみを活用したコミュニケーション能力育成方法の研究

研究課題名（英文）

Study of a communication skills training program utilizing character costumes.

## 研究代表者

今城 逸雄（IMAJYO ITSUO）

高知大学・教育研究部総合科学系・特任講師

研究者番号：00598550

## 研究成果の概要（和文）：

社会的課題である大学生のフェイス・ツー・フェイスのコミュニケーション能力不足を改善するために、着ぐるみ着装により視覚・聴覚・運動能力が大きく制限されることを利用したコミュニケーション能力育成方法を開発し試行した。

着ぐるみが生み出す他者との相互作用を重ねる中で、学生は、他者への思いやりや自己効力感を高めることが確認され、言葉や動作によるコミュニケーションの量や表現方法に、受講前後での明確な改善が見られた。

## 研究成果の概要（英文）：

The lack of ability of college students to communicate face-to-face is an important social issue. On a communication skills training program, students wore character costumes which greatly limited their visual, auditory and motor abilities while wearing the costumes and interacting with others, students displayed increased self-efficacy and compassion for others. Student showed a clear improvement in the amount and quality of physical and verbal communication before and after the class.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	500,000	150,000	650,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：着ぐるみ、コミュニケーション、サービスラーニング、相互作用

## 1. 研究開始当初の背景

日本経済団体連合会の「選考時に重視する要素」アンケート（2012）では、学生採用選考時に最も重視することは、9年連続でコミュニケーション能力が1位になっている。経済産業省では、コミュニケーションなどの「社会人基礎力」を意識的に育成し、評価を可能としていくことの必要性が打ち出され、2012年の中央教育審議会答申でも、自ら考え行動できる人材育成のための教育方法の開発と実践の必要性が指摘されている。

高知大学では、この点に対する教育的アプローチに早くから気づき、地域団体等の協力

を得たサービスラーニングの開発を行っている。この過程で明らかになったことは、農作業など比較的人との接触が少ないことには学生の抵抗は少ないが、フェイス・ツー・フェイスの協働作業や多様な年代との交流には積極性が見られないことである。

コミュニケーションは頭で理解するだけでは不十分で、行動に移し体験を積み重ねることで、その能力は高まるものである。しかしながら、行動の心理的ハードルが高いと、学生の多くはアクションを起こさない傾向がある。そのためハードルの「低さ」と、従来の「教えられる」学習方法ではない「体感

を伴った理解」をいかにして創り出すかが教育面での課題であり、人と相対しながら積極性を促すことのできる方法を模索していた。

## 2. 研究の目的

学生等による商店街での着ぐるみパレードや、中山間地域にあるミュージアムと商店街での実習に着ぐるみを取り入れた経験から、着ぐるみがコミュニケーション力の向上に効果があることがその後の振り返りから明らかになった。

着ぐるみを着装すると、視覚・聴覚・運動能力が大きく制限され、必ず誰かの助けを必要とするため、他者と周辺状況を強烈に意識化しなければならない。このことにより着ぐるみの着が、他者との関係を考え、自己を客観視する機会となり、自己表現の必要性や、チームワークの重要性、弱者に対する視点に学生が気づきを得る機会となると考えられる。

これらを通した精神状態と行動との関係性を明らかにし、学生の主体的なコミュニケーション行動を導くための全く新しい視点の教育方法の開発と、その効果を研究する。

## 3. 研究の方法

### (1) 学生を対象とした研究

#### ① 対象者

平成24年度高知大学「課題探求実践セミナー・地域協働入門Ⅱ（前期）」及び「地域協働企画立案（後期）」履修の1年生

#### ② 研究体制

着ぐるみの実技指導は、着ぐるみ経験を有する劇団員を外部指導者として依頼。

石筒覚（高知大学准教授）を研究協力者とした。

学外演習は、商店街、幼稚園など地域社会の多様な分野で行う体制を整えた。

#### ③ 意識変化調査

授業開始時の表情や動きと終了時の映像記録による比較調査。

コミュニケーション力自己評価アンケートと実施過程の振り返りシート、個人及びグループでの成果プレゼンテーション、終了時レポートにより調査した。

#### ④ 使用着ぐるみ

大学既所有3体（イヌ、ウサギ、クジラ）に加え、着ぐるみの目の位置が子どもに近い1体（名称：清流王子）を新たに制作。必要により外部団体が所有する着ぐるみを借用した。

#### ⑤ 地域協働入門Ⅱの授業プログラム

第1～3回授業と商店街での着ぐるみ体験からなる第1段階は、着ぐるみに触れ、自己の身体と他者との関係を意識し、関心を持たせる内容とした。

第4～6回授業と大学学食前でのショートショーの経験からなる第2段階では、グループでオリジナルショーの台本を考案し仕上げていく過程で、自グループメンバー内と他グループメンバーとで切磋琢磨する中で、多様な意見を取り入れ、自己の視点を広げることがを目的とした。

第3段階は、これまで学んだことを学外で実施したショーでの緊張感の中で、実行できたことと失敗したことから、学びを得ていくことを目的とした。さらに自己を見つめ、仲間との関係、観客や演習場所を提供した団体等との関係から社会との関わりを考えることとした。演習場所は幼稚園と商店街の2か所。幼稚園の夕涼み会のステージを借り、休憩を挟んで2グループが各1回のショーを実施。商店街では夏イベントの1ブースで、両グループ各3回、計6回のステージを行った。必ず全員が1回以上着ぐるみに入ることで、着ぐるみ・サポート・MCの役割を固定しないようにした。終了後に十分な時間を取って、振り返りをさせた。

第4段階は、グループ及び個人でのプレゼンテーションで授業全体の振り返りを行った。その後、グループ内の他メンバーに対するポジティブフィードバック（良い点）とチャンスフィードバック（改善すると良くなる点）を伝え合い、他者と自己を見つめ直させた。

レポートに加え、授業の感想をビデオ撮影し、授業に対する意見と表情などの変化を多く拾うように工夫した。

#### ⑥ 地域協働企画立案の授業プログラム

地域協働企画立案は、週末等を利用して地域団体等でサービスラーニングを行う授業である。サービスラーニングは、学生が様々な活動経験を通して、実習先や地域を理解する中で課題を発見し、その課題解決を企画実践することで、学業上の「学び」に結びつける。実習先を理解するためには、実習先の人と話し、学生間でも意見を交わす必要がある。コミュニケーション力がなければ実習での十分な成果は得られない。

そのため実習と並行し、社会に向き合うためのコミュニケーション力育成を目的に、着ぐるみを取り入れた演習プログラムを約1ヵ月（学内：授業3回・予行演習1回、学外1回）にわたり組み込んだ。

内容は、先進事例研究の「着ぐるみグリーティング体験ツアー」の調査結果を参考としたプログラムを考案した。

始めに学内で着ぐるみの特性や基本動作

を理解した後、グリーンディング体験のポイントであった、キャラクターにあった動きと子どもとの接し方を考え、実際に商店街に出てグリーンディングを行った。

#### (2) 先進事例研究

「着ぐるみグリーンディング体験ツアー」(ちょこグループ、東京都多摩市)に、調査補助学生3名を伴い参加し、学生の反応を調べた。

また、プロとして着ぐるみに関する専門的知識と経験を有するスーツアクターへのヒアリング調査を、ちょこグループとフォレスト・エンターテインメントの協力で行い、着ぐるみによる内面的成長や社会的効用を幅広く捉え、演習へのフィードバックと学生以外の状況を踏まえた研究とした。

#### 4. 研究成果

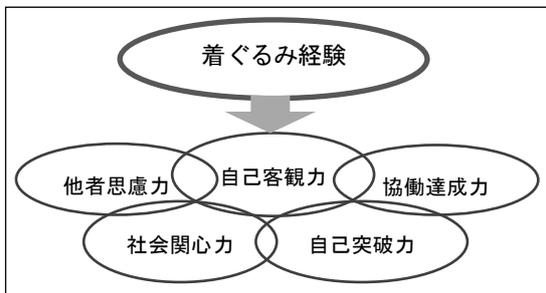
受講前と受講後の比較で、学生の言葉や動作によるコミュニケーションの量や表現方法に明確な改善が見られた。

地域協働入門Ⅱでは10名全員が授業を受け「着ぐるみがコミュニケーション力を高めることに役立った」と回答。社会への関心の広がりも見られた。短期間であった地域協働企画立案でも、9名の内7名がコミュニケーション力を高めることに役立ったと回答している。着ぐるみ特有の他者との相互作用を通じて、自己の殻を破り自己効力感を高めていることが確認された。

今回試行した着ぐるみを活用したコミュニケーション能力育成プログラムの効果を分析すると、図1の通り自己客観力、他者思慮力、協働達成力、社会関心力、自己突破力の5つの力の高まりを学生に与えていると考えられる。

【図1】

着ぐるみを活用したコミュニケーション能力育成プログラムが高めた学生の力



#### ① 自己客観力

着ぐるみに入ると、視界の悪さ、音の聞こえ辛さ、動き辛さなどを体感する。また着

ぐるみを着ている時は、途中に人前で着ぐるみを脱ぐことは許されない。着ぐるみの中で感じる孤独感が、自己をメタ認知する機会を与え、着ぐるみを着た自分の行動が人からどう見られているかを意識することになる。日常で何気なく行っている顔を見合わせた、言語によるコミュニケーションが、いかに楽であったかを思い知らされるのである。

着ぐるみによる非日常の世界に身を置くことで、人の意見を聞くことの大切さや、仲間の反応をより意識化させることとなり、日常の自己行動を客観的に振り返ることになると考えられる。

#### ② 他者思慮力

仲間や観客が何を求めているのか、何をしなければよいかを察し、思いやりを行動に移す力である。

着ぐるみを着た仲間に対し、サポート役は、その場の状況から、何をすれば良いのかを考え行動しなければならない。着ぐるみは言葉を使えないため、動作で意思を伝えることになる。互いに何をすれば良いか察することができるようになる体験は、より連帯感を高めることにつながる。

観客に対しても、楽しんでもらうために何をしなければならないか考え、行動に移さなければならない。気持ちよく見てもらうためには何をすれば良いか、観客を引きつけるにはどうすれば良いかなどを、自分で、また仲間と考えることで、自己満足のためではなく、観客に満足を与えることを考えるようになる。

自己中心的な思考から、外に向かった思考に意識が広がるこのことが、他者に関心を持つ思考につながる重要なポイントだと考えられる。

#### ③ 協働達成力

文字通り仲間が協働して達成する力である。人は一人でできることには限界があり、他者と協力することでより良いことを達成できる。

着ぐるみに入った自分が、仲間に助けられる経験をし、サポート役になった時には助ける側の経験をする。この相互に支え合う経験の積み重ねが、協働意識を高めると考えられる。

またアクシデントや失敗を仲間と一緒に克服していくことで、互いに成長を実感できる。

さらに着ぐるみを着ていると、観客からエネルギーをもらうことを実感する。子どもからも大人からも返ってくる笑顔が、自己効力感を与え、他者とのつながりを実感することになる。

自分の行動で相手から笑顔をもらうことは、幼児期におけるコミュニケーションの大きな動機である。コミュニケーション能力に不安を覚える学生に対しても好影響を与えると考えられる。

#### ④社会関心力

自分を取り巻く社会と自分との関係を考える力である。学外演習で場所を提供してくれた幼稚園や商店街に対し学生からは感謝の言葉が出ている。着ぐるみによる行動が、人々に笑顔を与え、また支えられた経験は、社会性を高めることにも大きくつながっていると見える。

#### ⑤自己突破力

着ぐるみという未知の体験に一步踏み出したことで、恥と思っていたことが恥ではなく、ふっ切れた瞬間に心が軽くなり楽しめる経験を与える。自分で壁だと感じていたことが、実は突破できることであったと気づかせる。着ぐるみを着ることで、自分を越えた自分になれる自信につながるのである。

着ぐるみが持つ動作や感覚、言語によるコミュニケーションの制約は、感覚を総動員して外の状況を判断し、意思を伝えなければならなくさせる。サポート役にも、着ぐるみに入る者や観客との間で、その場その場の状況判断と先を予測した行動が求められる。このことが相互に目を見ることを意識させ、相手に理解してもらうためにボディランゲージが増える行動変化につながる。この他者を理解しよう、自分の思いを伝えようという積極的な相互作用がコミュニケーション力を高める基本であると考えられる。

さらにこの特殊な体験を共有することで、仲間同士のコミュニケーションも深まりやすい。そのため着ぐるみ着装時は苦しかったにも関わらず、脱いだ後は必ず笑顔が出て会話が生まれるのである。

以上のように、着ぐるみを着装することで起きる他者との相互作用がコミュニケーションをより意識化させ、その経験を重ねることでコミュニケーション能力の育成を有効に行えるのである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

(1) 今城逸雄、着ぐるみが作り出す相互作用によるコミュニケーション力育成プログラムの有効性の検証、高知大学教育研究部総合科学系地域協働教育学部門研究論集

Collaboration、査読無、Vol.3 2013、5-18

(2) 今城逸雄、着ぐるみを活用したコミュニケーション能力育成プログラムの効果の検証、高知大学教育研究論文集、査読無、第16巻、投稿中(掲載確定)

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

(1) 報道関係情報

①朝日新聞デジタル版、2013年5月19日(学生よ、着ぐるみ姿で街に出よ！高知大でユニーク授業)

<http://www.asahi.com/national/update/0518/OSK201305180026.html?tr=pc>

②朝日新聞、2013年5月18日大阪版夕刊、2013年5月22日高知版(授業内容と実践した学生の変化)

③さんさんテレビ、2013年4月27日(着ぐるみでマラソンに協力)

④高知新聞、2013年4月10日1面及び中面、(受講した学生の変化)

⑤高知放送テレビ「こうち eye」、2012年4月12日(地域協働入門Ⅱ初回授業)

(2) 高知大学総合教育センター社会協働教育部門ホームページへの掲載

①【地域協働企画立案】四万十桜マラソンに協力する高知大生を、さんさんテレビが密着取材！、2013年2月25日

<https://olss.cc.kochi-u.ac.jp/collabo/info/2013/02/25/>

②【地域協働企画立案】実習成果を報告しました、2013年1月24日

<https://olss.cc.kochi-u.ac.jp/collabo/info/2013/01/28/>

③【地域協働企画立案】学生企画の交通安全イベントで子どもたちが大喜び、2013年1月23日

<https://olss.cc.kochi-u.ac.jp/collabo/info/2013/01/23/>

④【地域協働企画立案】「るんだ商店街」で着ぐるみコミュニケーション、2012年11月21日

<https://olss.cc.kochi-u.ac.jp/collabo/info/2012/11/21/>

⑤【地域協働企画立案】赤レンに清流王子登場、2012年11月16日

<https://olss.cc.kochi-u.ac.jp/collabo/info/2012/11/16/>

⑥【地域協働入門Ⅱ】着ぐるみのプロに習った技を、商店街で実践、2012年9月12日

<https://olss.cc.kochi-u.ac.jp/collabo/info/2012/09/12/>

⑦子どもたちと着ぐるみコミュニケーション、2012年7月17日

<https://olss.cc.kochi-u.ac.jp/collabo/info/2012/07/17/>

⑧着ぐるみコミュニケーションのススメ、2012年6月29日

<https://olss.cc.kochi-u.ac.jp/collabo/info/2012/06/29/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

今城 逸雄 (IMAJYO ITSUO)

高知大学・教育研究部総合科学系・特任講師

研究者番号：00598550

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 研究協力者

石筒 覚 (ISHIZUTSU SATORU)

高知大学・教育研究部総合科学系・准教授

研究者番号：50314977